

山と博物館

第50巻 第2号 2005年2月25日

市立大町山岳博物館



リスの足跡

文・写真 朝重孝治

冬の自然の楽しみ

「雪は軽くて暖かくて、気持ちがいい。森はシンプルな美しさと静寂に包まれます。少しの工夫で決して寒くはありません。」

そういつて都会の人を案内することが多いのですが、今は防寒着や靴それにスノーシュー（西洋カンジキ）やクロスカントリースキーなど便利なものが出来て、冬のイメージも変わりつつあるようです。最近では、スノーシューを履いての、森の散歩もだんだんと認知されるようになって来ました。

これなら、いつもは歩けない深い森も雪の時期なら自由に歩くことが出来ます。この時期ならではの透明で凜とした森の中はただそれだけでも素晴らしいものです。また、そこにちりばめられた動物たちの足跡からは、彼らの息づかいも聞こえてきます。

雪が降り止んで、日が差してくるような時はまた格別です。昨日もそんなお天気で、歩き始めるとすぐに、サルやカモシカ、テン、リスなどの足跡がたくさん付いていて、「昨夜は動物たちがわくわくしながら動き回っていたんだな」と思っています。「わくわく」なる感情を彼らが持ちえているかという話になると根拠はないので人が見てそう思うような足跡としかいえないのですが、ひとつひとつの足跡を辿っていると、まるで自分が動物になつてかのような気になつてくるということかもしれません。

まして、月明かりの夜は、さらに幻想的なものを感じます。眩しいほど明るい森の中は、裸の木々に積もった雪に飾られて、本当に美しく神秘的でさえあります。

山岳雑誌の編集に携わって(下)

―絶大な支持を得た岳人別冊・夏山号―

西山暉大

ビギナー向けの編集が好評

岳人別冊「夏山」号は一九六〇年代初めから毎年六月一日に発売されており、現在も好調な売れ行きを誇っている。この雑誌は月刊山岳雑誌「岳人」の季刊版で、夏休みに登山を楽しむ登山愛好者を対象にした登山案内書で、約半世紀の歴史がある。日本アルプスや尾瀬、八ヶ岳など山小屋が完備していて、登山コースが整備された山域の案内を中心に編集しており、ビギナーに愛読されている。

「山溪J.O.Y」も同様で、月刊誌「山と溪谷」の夏山季刊版である。岳人別冊「夏山」号と「山溪J.O.Y」は、毎年夏山シーズン直前になる書店に山積みされる登山のベストセラーである。筆者が岳人別冊「夏山」号の編集人を務めた九〇年六月発行の「90の夏山」号から「97の夏山」号までの八年間は、中高年登山の最盛期であった。

「百名山」ブームに沸いた92年夏

一九七〇年後半からブームになった夏山登山は、若者の夏休み登山ばかりではなく、中高年登山者も巻き込んだ夏の一大イベントになっていた。これら登山者を当て込んでか日本各地の山小屋が整備され食事付き宿泊が可能になった山域が増え、登山者も日本アル

プスだけではなく、北海道や東北など未知の山域へと足を踏み入れるようになった。八〇年代に入ると登山者の増加に伴う諸問題が発生し高山植物荒らし、自然破壊、し尿処理問題等がクローズアップしてきた。この問題は現在でも根本的な解決策は見当たらず、山小屋や行政機関、山岳団体、その他諸々の団体が頭を痛めている。

一方、登山の魅力に取りつかれた人々の目標になったのが深田久弥の名著「日本百名山」で紹介されている名峰を登り尽くそうというブームである。北は北海道・利尻岳から南は屋久島・宮之浦岳まで文字通り百名を登ろうというものである。このブームに合わせて編集したのが九二年六月一日発売の岳人別冊「92の夏山」号(写真5)である。特集「日本百名山」――北へ南へ、と銘打ってカラーグラフと二色刷りで百名をグラフィックで紹介した。この企画は大当たりし売り切れが続出、書店からの追加注文が殺到した。この年は「日本百名山」のビデオも発売され、登山界は文字通り「百名山ブーム」に沸いた。

この「日本百名山」企画で、筆者が取材したのは南アルプス・悪沢岳・赤石岳縦走であった。この魅力は荒川前岳から荒川小屋にかけての美しい高山植物のお花畑である。ここで出会った背高のシナノキンバイの濃黄色の花や濃藍色のミヤマトリカブト、濃紫色

のミヤマオダマキ、ヨツバシオガマの美しい花々は今でも脳裏に焼き付いている。

再び高山植物の魅力に惹かれて

「92の夏山」号の売れ行き好調に気を良くした筆者は「93の夏山」号は「花の山案内」を特集した。この取材には北海道・利尻岳と南アルプス・光岳に向いた。七月の利尻岳取材の目的はコースガイドであったが、高山植物・リシリヒナゲシと対面したかったためでもある。高山植物名には山名を冠したものが多く、リシリオウギなどリシリという文字が頭についた植物も十種余りに及ぶと言われている。しかしリシリヒナゲシは国内では唯一ケシ属の高山植物として利尻島特産である。

取材でこの花を見つけたのは山頂(一七二二m)から少し下った西斜面で、火山礫が崩落した斜面に楚々として風に揺れていた。黄色の四花弁が優雅で美しく、夢中でカメラの



【写真5】

シャッターを切ったのを覚えている。八月の光岳(二五九一m)取材はハイマツ生育の南限を確かめたかったのと、遠山川沿いの便ヶ島に新しくオープンした「便ヶ島登山小屋」の紹介が目的だった。便ヶ島登山小屋は易老渡の近くにあり、南アルプス南部の信州側の登山基地として便利

だった。易老渡には新しい橋が架けられていて遠山川をいとも簡単に渡れたのには驚いた。一昔前までは遠山川の渡河が難儀で、易老岳に登るのがきつかったのだ。この取材で会った女性中高年登山者はのんびりしており、朝の八時過ぎに出発し、聖平小屋まで行くと言っていたのにはビックリ。登山の鉄則「早発ち、早着き」は無視されていた。登山の大衆化は歓迎だが、セオリー無視はいかかなものか、を痛感したのだった。残念なのはその後、便ヶ島登山小屋は一時営業中止になってしまった。

光岳はまだ静けさを残した山で、登山時に出会ったのは某大学のワンダーフォーゲル部の一パーティだけだった。易老岳から光岳への縦走路は樹林帯で、シラビソの大木が印象的だった。センジケ原のハクサンコザクラの群落は忘れられない。山頂周辺は針葉樹の背丈が伸びて、展望が遮られていたが日本南限のハイマツが生い茂っていた。これを確認で

きたことに何故か満足したことを覚えている。光岳の山名由来になった「夕日に光る巨岩・光岩」は樹林に隠れて見えなかったが、青い屋根の光小屋の静かなたずまいはハイマツの樹海とともに記憶に残っている。

岳人別冊「夏山」号の取材は「97の夏山」号まで続いたが、筆者が取材に出掛けたのは高山植物の美しい山がほとんどであった。学生時代に覚えた高山植物は約百種類だったが、その後、山から離れていたため花の名前を忘れていた。七〇年に「岳人」誌の編集に携わるようになってから、再び高山植物を勉強した。「花の百名山」の著者で作家の田中澄江氏に「岳人」誌の連載企画「折々の山」(久恋の山)をお願いしてからは各地の山に同行させていた。花の講義を受けた。また山岳写真家の白旗史朗氏にも多大なご指導をいただいた。お陰で北アルプスの縦走路脇に咲く花くらははマスターしたが、標高が低い山に咲く高山植物までは覚えきれなかった。

「94の夏」号から「97の夏山」号までの取材で記憶に残っている花の名山は北海道の羅臼岳、斜里岳やトムラウシ、東北の早池峰山や岩手山、飯豊山など「日本百名山」に網羅されている山々である。九州の開聞岳や屋久島の宮之浦岳も取材したが、潜在的には「日本百名山」の全山登頂を願っていたのかもしれない。因みに筆者が未踏破の「日本百名山」は十八座である。願わくば足腰の立つうちに百山すべてに登頂したいものである。

95年、岳人別冊「秋山」号を発売

九四年真夏のこと、「夏山」号の読者アンケートの中に、中・高年登山者の意見として「夏



【写真6】

山号のようなレベルで秋山登山のガイド雑誌を希望する」がかなり多かった。かねてより「岳人別冊」の強化策を模索していた折りだったので、これを機に「秋山」号の発行に踏み切った。企画立案は編集部主導で具体化し、編集は外部プロダクションに依頼した。

創刊号の岳人別冊「95の秋山」(写真6)は九五年九月二十五日の発行で、紅葉特集をメイン企画にし、巻頭には作家の立松和平氏に登場願って「黒部錦織紀行」を収録した。秋真つ盛りの黒部川下ノ廊下の写真と紀行文は好評で、さい先の良いスタートになった。特集は秋山登山のコースガイドに加え、出で湯探訪、キノコの味覚発見、山の博物館・美術館訪問、民話紹介などカルチャー路線を加味して多角的な編集に仕上げた。「96の秋山」号は秋の北アルプス・上高地周辺にスポットを当てた。みなみ・らんぼう氏には持ち味のユニークなタッチで「晩秋の北八ヶ岳徘徊」を写真と文で綴っていただいた。作家の綴る

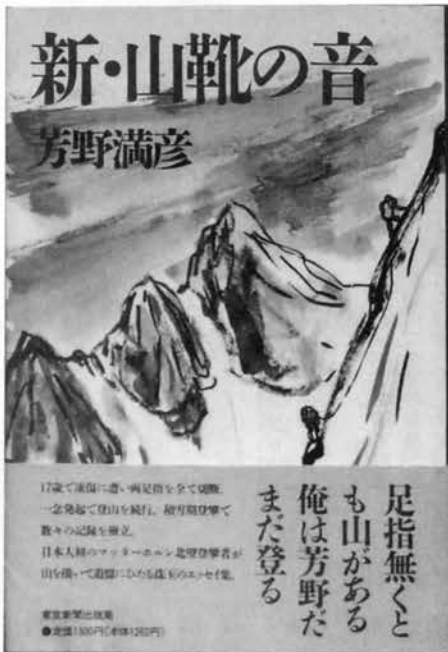
秋山エッセーとカルチャー特集は「秋山」号のセールスポイントになり、その後も続いた。「秋山」号の思い出は創刊号の発行に大きなエネルギーを使ったことが強く印象に残っている。何分にも創刊号を含む三冊の発行のみで現役退任になったが、北アルプスの麓の安曇野ちひろ美術館、豊野行男記念館や帯広市の坂本直行記念館の誌上紹介等は幾分かは寄与したと考えている。

『新・山靴の音』を出版

「岳人別冊」の編集を担当していた八年間は単行本や写真集の出版にも手を染めた。九三年十二月には芳野満彦氏のエッセー集『新・山靴の音』(写真7)を出版した。初出は「岳人」誌に九〇年五月号から九二年二月号まで連載された原稿を加筆・訂正したもので挿絵を一新し、四六判・並製・二一六頁の

仕様にした。芳野さんとは彼が「アルパインツアー」社を設立した頃からの付き合いで、筆者が「岳人」誌の編集記者時代は新橋界限でよく会って意思の疎通を図っていた。この出版でも本の帯に入れるキャッチフレーズで「足指無くとも山がある 俺は芳野だまだ登る」と意気軒昂だった。いまでも毎年六月に開かれる夏山相談室(東京・上野松坂屋デパート)にはゲスト出演しており、山小屋の主との交流が深い。筆者も彼との旧交を温めている。

九六年七月には寺田甲子男氏(東京緑山岳会会長)の登山人生回想録「東京したまち山岳会」を出版。これも筆者が「岳人」誌在席時代の関わりで出版したもので、著者の戦中・戦後六十歩の歩みを綴った痛快物語である。そのほか岳人別冊「スキー」号の編集や山岳写真集、東京新聞の連載企画の出版にも関わった八年間であった。(元「岳人」誌編集長) (おわり)



【写真7】

